泥炭地でもバッチリ！大規模経営に適した“子実用とうもろこし”導入のポイント

概　要 Abstract

新たな転作作物として、子実用とうもろこしが注目されており、南空知を中心に作付けが広がっています。

現地での栽培実証を通じ、作業体系や経済性など、導入のポイントを整理しました。

成　果 Results

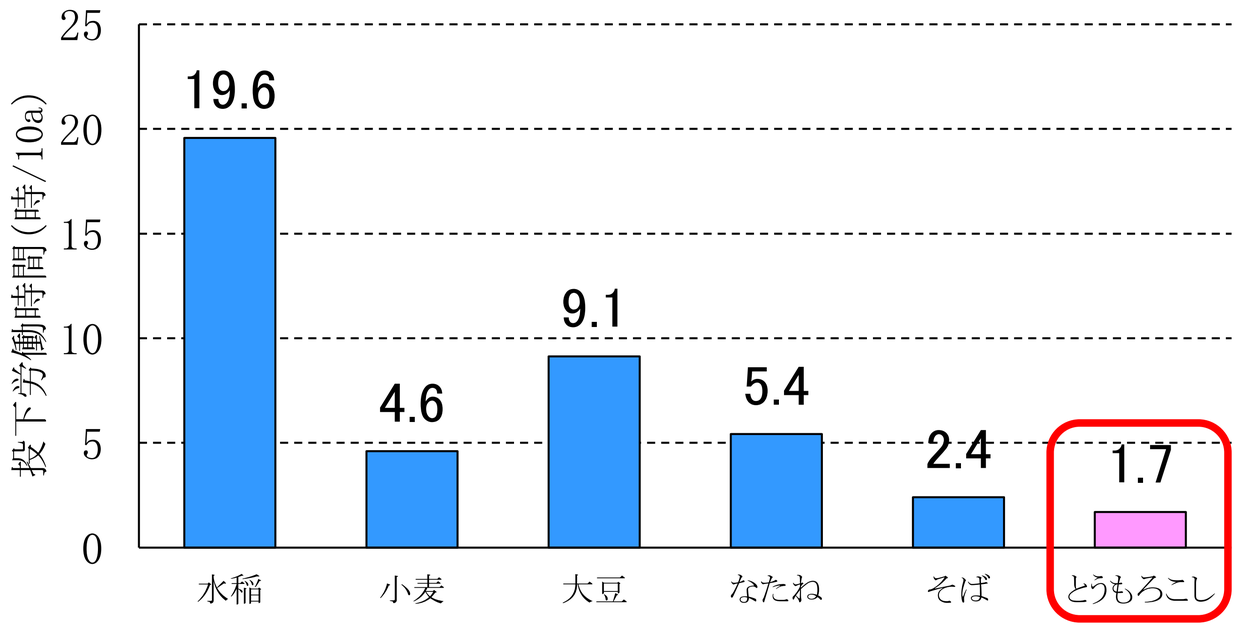
実証農家での作業体系（泥炭土、畑地化初年目）

作業時期	作業内容	作業機
前年秋	心土破砕	サブソイラ
5月上旬	耕起	スタブルカルチ
	砕土整地	パワーハロー1回 +アップカットロータリ2回
5月中旬	施肥・播種 （供試品種）	真空播種機 （「P8025」85日、早生中） 8,889～9,524本/10a
	鎮圧	ケンブリッジローラ
6月上旬	除草剤散布	ブームスプレーヤ
10月中～下旬	収穫・運搬	普通コンバイン （子実水分30%以下） ダンプトラック
	乾燥	循環式乾燥機 （小麦乾燥モード、 乾減率：約0.6%/h）
	残渣処理	ロータリハロー
	心土破砕	サブソイラ

○水田作地帯で、既存の機械設備を活用可能。

○投下労働時間は10aあたり1.7時間（小麦の1/3程度）。

○畑地化初年目の泥炭土圃場でも、子実収量1,100kg/10a（水分14%換算）を達成できる。



各作物の10aあたり投下労働時間

収穫機と経済性からみた作付面積

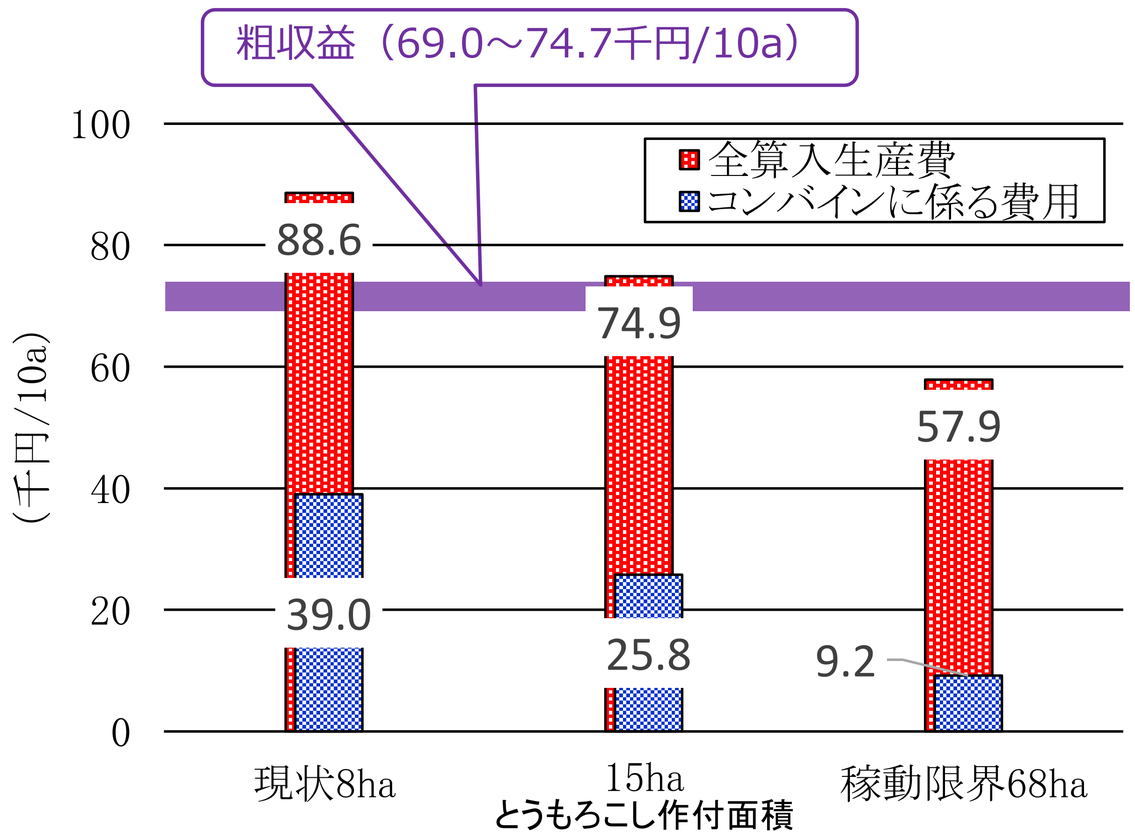
○普通コンバイン中型機種（AVERO240）により、日あたり4.5ha、収穫適期内に68haの収穫が可能。

○乾燥機合計容量が約500石必要となるため、共同利用が前提となる。

○収穫機に係る費用の割合が高く、生産費は収穫面積に影響される。

○実証農家、作付面積8haでの全算入生産費（10aあたり）は88.6千円で、粗収益69.0～74.7千円（14%収量約1,100kg/10aにおいて）を上回るが、15haを確保すれば、粗収益で全算入生産費を賄うことができる。

○稼動限界の68haまで拡大すれば、更に収益を高めることが可能。



実証における作付面積と生産費

普　及 Dissemination

・南空知での作付面積：H25の約30haから、H27は140ha超に拡大。今後も広がることが予想されます。

連絡先 Contact

中央農業試験場生産研究部　０１２３－８９－２００１
生産システムグループ　central-agri@hro.or.jp

この研究は、『攻めの農林水産業の実現に向けた革新的技術緊急展開事業』（生研センター、H26-27）にて実施したものです。